

現代民話と〈お迎え〉体験

島根大学教育学部 諸岡了介

1. 〈お迎え〉体験という主題

本稿の主題である〈お迎え〉体験とは、終末期患者が自らの死に臨んで、既に亡くなっている人物などの通常見ることのできない事物を見る類の体験を指す。相澤出を研究代表者とする筆者らの研究チームが2007年、在宅ホスピスを利用した世帯を対象に宮城県で行った調査では、有効回答366件の内155件(42.3%)について〈お迎え〉体験が報告された(諸岡ほか2008)。こうした数字は、今日こうした体験が生じることがまれではないということを示唆しているように思われる。具体例をふたつほど挙げれば、ここで〈お迎え〉体験と呼ぶものは、次のような種類のものである。

〔終末期にあった父親が〕へやのすみにだれかいるって言うのでだれなのって聞くと「母ちゃんだ」迎えにきたのかって会話してました。なくなる1ヶ月ぐらい前です。(2007年宮城県、在宅ホスピス調査より)

私のいとこの話だが、バイト先でいつも「死んだバアさんがいる」と言っていたおじいさんがいた。いとこは不気味でしかたなかったらしいが、おじいさんは幸せそうだったという。しばらくしてそのおじいさんは亡くなった。いとこはまさに「お迎えが来てたんだろう」と言っていた。(2010年島根県、講義における学生の回答から)

本稿の立場から注目しておきたい〈お迎え〉体験の特徴のひとつは、そこで現れるものが、先に亡くなった親や伴侶、知人の姿である事例が多いということである。上記調査において語られた体験の内容をみると、人物の現れが87.1%となっており、既に亡くなっていた家族や知人の現れに限っても過半数の52.9%に上っている。「通常見ることのできない事物を見る類の体験」と広義に理解する場合には〈お迎え〉体験において出現するものは人物に限られないが、既に亡くなった家族や知人が現れるものをもっとも典型的なパターンと言うことができよう。以下、本稿では主にこの典型的なパターンの〈お迎え〉体験を考察の焦点とする。

近年、このような〈お迎え〉体験に対する記述や報告が、上記調査の先行調査にあたる清藤らの研究(2002)をはじめとして、あちこちに散見される(谷山 2004; 中山 2005; 浅見 2006; 大井 2008; 国森 2009; 信濃毎日新聞社文化部 2010)。これらの報告は、終末期医療に対する社会的関心の高まりを背景にしたもので、事実いずれも医療・福祉実践を念頭に置いた著述となっている。ところが宗教史学や民俗学の分野に目を向けてみると、〈お迎え〉体験を主題として追究している研究は、管見の限り見あたらない¹⁾。上記調査等から得られる感触からすると、こうした研究の空白は奇異にも

1) 執筆者らによる概観として桐原・諸岡(2009)があるが、ごく簡潔な記述にとどまっている。

映る。

宗教史学に関して言えば、ひとつには、浄土信仰における阿弥陀仏の来迎と同一視されることで〈お迎え〉体験の独自性が気づかれてこなかったという事情がある。ところが、現代の〈お迎え〉体験は、その典型において迎えに来るものが家族や知人であるという点で、浄土信仰の来迎とははっきり区別される。実際、古代から近世に至る往生伝について主だった文献に当たってみても、家族や知人が迎えに来るというパターンのお話をを見つけることはできない¹⁾。

民俗学の分野においても〈お迎え〉体験への言及は少ない。蛸島直(1998)は日本の民俗学について、葬送儀礼や靈魂観念に関しては膨大な研究蓄積がある一方、実際の死そのものをめぐる人びとの意識や行動に関する研究は乏しいと指摘している。従来の民俗学は「個人差や個体差を軽視しがち」であるために「客観性を定めがたい異常な体験」としての死を避けてきたのだというが(蛸島1998: 149)、そうだとすれば、〈お迎え〉体験譚を含め、死にゆく人のようすに関わる物語が研究対象になってこなかったことも道理であろう。

しかしそんな中であっても、再び蛸島が言及しているとおおり、死にまつわる物語を多数収録した数少ない著述として、日本民俗学にとって記念碑的著作である柳田國男『遠野物語』(1910年)と「遠野物語拾遺」(1935年)、それから松谷みよ子の『現代民話考』がある。特に『現代民話考』に集められた膨大な「現代民話」の中には、〈お迎え〉体験譚が数多く含まれている。

これらの文献は、〈お迎え〉体験の地域的・時代的分布を辿る上で稀少な資料となる。そこで本稿ではまず、『現代民話考』に見られる〈お迎え〉体験譚の整理と分析を行いたい。それに続いて『遠野物語』に考察を加え、死にまつわる物語の変遷を窺いつつ、これまで〈お迎え〉体験が注目されてこなかった事情についても考えてみたい。

2. 『現代民話考』における〈お迎え〉

さっそく、松谷みよ子『現代民話考』に見られる〈お迎え〉体験譚の分析に入りたい。今回参照したのは、立風書房版『現代民話考』(1985～1996年)に新たな聞き書きを追加して再版された、ちくま文庫版全12巻(2003～2004年)である。さらにまた、いくつかの新しい聞き書きが含まれる『異界からのサイン』(2004年)も参照した。

『現代民話考』には死にまつわる話だけでも膨大な数が収められており、その内容も容易に整理しかねるほど幅が広い。その中から〈お迎え〉体験を抜き出そうとする際には、〈お迎え〉の内に数えるべきかどうか判断に迷う境界的な物語が少なくなく、厳密な指標による定義や分類は困難である。とりわけ、死に瀕した際の体験として、道や川を通過して花畑などに出、そこに既に亡くなっている家族や知人が待っていたという筋書きの他界訪問譚が大量に含まれている。今回の分析では、この手の物語については直接の分析対象とはせず、〈お迎え〉の典型的パターンにより近い、死に瀕した人物のもとに他界へと誘う人物等が現れたというケースに対象を限定した。

1) 各種の往生伝については『日本思想大系』(岩波書店)の6巻と7巻、『近世往生伝集成』全3巻を参照。往生伝に関する概説としては田村(1983)、笠原(1978)を、往生伝的浄土信仰については華園(1983)を参照のこと。

[表] 『現代民話考』に見られる〈お迎え〉体験物語の分布

	北海道	東北	関東	中部	関西	中国	四国	九州	外地・戦地	不明	年代別合計
1890～99年							1				1
1900～09年								1			1
1910～19年		1	1								2
1920～29年			1	1							2
1930～39年			1		1						2
1940～49年	1				1		1	1	2		6
1950～59年		2	1	1							4
1960～69年			2		1			1			4
1970～79年			5	1				2			8
1980～89年		2	3	2		1	1				9
不明		1	4	3	1	1		3	4	3	20
場所別合計	1	6	18	8	4	2	3	8	6	3	59

* 『異界』95.5が、静岡と高知の2ヶ所の報告を含むため、延べ総数は59件となっている。

結果、〈お迎え〉体験と見なしうる話として、58件を数えることができた。その内51件が第4巻と第5巻に集中しているので、その他の巻に所収のものだけを挙げておけば、2.267.9、2.260.5、2.341.12、6.473.8、『異界』22.2、同95.5、同108.11である¹⁾。

『現代民話考』は、松谷やその協力者が直接聞きとった話、松谷らの元へ文書で寄せられた話、それから他の出版物から引用した話から構成されており、58件中他の出版物に拠るものは5件である(4.295.4、5.135.6、5.146.13、5.159.2、5.218.5)。物語の記述形式を見ると、聞き取り・伝聞形式のものが23件、傍らで立ちあっていた人物による報告が19件、自身の体験談として語られているものが15件、碑文の書き写しが1件である。

〈お迎え〉体験譚の時代的・地域的分布については、[表]のような結果となった。もちろん、この数値は統計学的な厳密さや代表性を期待して読むべきものではないが、〈お迎え〉体験に関する記録が乏しい中、分布が確認されること自体に意味がある。

北海道の1件はアイヌのもので、他の出版物からの引用である(5.159.2)。沖縄からの話はない。他に数が少ない地域として、青森・秋田・岩手の北東北には1件の報告しかなく、それも「多くの老人たちが空から降りてきて」「神様だと思って懸命に拝んだというのです」という他に例のないパターンの物語であることが目につく(岩手県滝沢村、5.142.2)。地域別には関東が多く、時代別には年代が下るにつれ数が増えるという大まかな傾向に加えて、1940～49年の時期のものがやや多く感じるが、いずれも企画・編集の方針が反映したものと解釈できる程度の偏りである。

1) “4.295.4”は、『現代民話考』第4巻295頁4行目からはじまる話との意味、“『異界』22.2”は、『異界からのサイン』22頁2行目からはじまる話という意味である。以降も同様。

物語の内容につき、〈お迎え〉体験をした人物のその後の成りゆきに関しては、死去したというものが32件、〈お迎え〉に來た人物を追い返すなどして生存したというものが21件、生死が定かでないものが4件である。まったく生命の危機が語られていないものが1件あるが、これは死去した友人が頻繁に枕元へ現れて「早くこい、そしていっしょに墓をやろう」と誘ってくるという話である(5.132.3)。

〈お迎え〉に現れたものの内容は、既に亡くなっている家族・親戚が36件、友人が9件、不明な人物が2件である。乗り物が出現しているものには、船が5件あったほか、「火の車」、「馬」、「馬車」が見うけられる。宗教的表象としては、「神様」が2件あるほか、「お坊さん」、「法然上人さん」、「氏神」、「死神」、「地藏尊」が各1件ずつある。意図して特定宗派に偏った説話の収録を避けた可能性があるにせよ、往生伝に典型的な阿弥陀の來迎は1件の報告も見られなかった。神仏の出現が存外に少なく、家族や知人の出現が大多数を占めるという傾向は、2007年在宅ホスピス調査から得られた知見と合致している(諸岡ほか2008)。なおこの点に関して、関西地方では4件すべてのケースで家族・知人以外のもの(法然、地藏、船、空から降りてきたいっばいの人)が出現しており、特異な分布を示している(4.174.9、4.295.4、5.104.1、5.144.5)。58件中もっとも古いものは明治中頃という高知の記録で、現れたものは船である(5.90.2)。家族・知人が現れるパターンで最古のものは、1901年頃という鹿児島県の報告である(5.130.3)。

死者などの現れに対して用いられている文中の語彙は、「お迎え」が4件、「迎え」が24件、動詞「迎える」が1件、「連れる」「連れ(に來た)」が3件、「呼ぶ」が1件であった。「來迎」も1件あったが、先に触れた、書き写された碑文の文面中の表現である。これらの「お迎え」「迎え」という表現は、必ずしも死を含意する意味で用いられているとは限らないが、「亡くなった人のお迎えは、死の報せという」(5.131.15)といった言い方があるのは興味深い(福島県いわき市)。これと類似のものに、「病人の付添いを長い間しているという家政婦さんは、死んだ人と話すようになると、もう長くありませんよと言い」(5.61.8)という千葉県千葉市での記述や、広島県比婆郡について「この地方の老人の間には、色のついた天然色の夢を見ると死が近いという話があったという」(4.232.6)といった言い伝えも見えている。

以上、『現代民話考』の整理・分析からは、〈お迎え〉体験の記録が20世紀初頭にまで遡りうるものであり、少なくとも太平洋戦争期以降においては広い分布が認められるものだと言うことができよう。また、紙幅の関係で逐一確かめることはできないが、物語の内容が多様であること、傾向としては神仏よりも家族や知人の出現が勝っており、また死者たる家族・知人の現れが必ずしも恐怖の対象となっていないこと、明確な他界観や宗教的な救いの要求があまり認められないことといった諸点において、『現代民話考』における〈お迎え〉体験譚は、2007年在宅ホスピス調査における〈お迎え〉体験譚と共通した調子を持っていることが分かる。宮城県の実例は1件であったが、東北地方に偏って存在しているといった事実もないことからしても、現代における〈お迎え〉体験は(2007年に執筆者らが調査を行った)宮城県や東北地方に特異な現象ではなく、日本社会の広い地域に分布してきた体験であり物語であるとの見通しをつけることができるだろう。

3. 『遠野物語』と〈お迎え〉

続いては、太平洋戦争期以降の説話を中心とした『現代民話考』から時代を遡り、明治末期頃の収集による『遠野物語』『遠野物語拾遺』について見てみたい。もちろん、全国から話を集めた『現代民話考』と、佐々木喜善を仲立ちに岩手県の一地方の口碑を編集した『遠野物語』とを単純に比較するわけにはいかないが、死にまつわる物語の記録が乏しい状況下にあっては、『遠野物語』は当時の様子を窺う上でひとつの貴重な手がかりとなりうる。

『遠野物語』正篇では全119話中24話ほど、「拾遺」では全299話中43話ほどが、死に関わった物語と見なされる。その中で多いパターンとしては、死の予兆（「シルマシ」）に関する話のほか、仮死状態の下で他界を訪れるなどの経験をする他界訪問譚や、既に死した人物や終末期にある人物が不思議なしかたで姿を見せる既死者・臨死者出現譚があり、それぞれ〈お迎え〉のパターンと重なるところがある。正篇第97話、拾遺第155話、156話、157話、158話、159話は意識不明の仮死状態における体験であり、いわゆる臨死体験に当たる。その内、正篇第97話は亡くなった父や息子に、拾遺第157話は亡くなった母に出会ったと語られており、「迎え」に来たのではないものの、先立った家族との懐かしい邂逅というモチーフを含んでいる点で、この2話は〈お迎え〉体験譚にもっとも近い。

もっとも目立っているのは、死に瀕した人が現れるはずのない場面で姿を見せるというストーリーの既死者・臨死者出現譚である。拾遺第160話には「生者や死者の思ひが凝つて出て歩く姿が、幻になつて人の目に見えるのを此の地方ではオマクと謂つて居る」とあり、佐々木喜善は別の書物でこれを「幽霊とは自ら別である」と解説している（佐々木 [1924] 1974 : 104）。臨終時に姿を現し、人々への最期の挨拶や寺参りをする話としては正篇第86話、87話、88話、拾遺第160話、161話、通夜などに死去したばかりの人物が姿を現す話としては正篇第22話、23話、拾遺第167話、168話がある。死者が出現する話のうち、正篇第99話、拾遺第29話、137話、169話は、ステレオタイプな幽霊譚に近い。なお、『現代民話考』の中にも臨死者出現譚は数多く収められている。

拾遺を含めた『遠野物語』には、死に瀕した人物の出現を主題とする臨死者出現譚が目立つ一方で、家族や知人が臨死者の前に現れる典型的なかたちの〈お迎え〉体験譚はひとつも見られない。また、『遠野物語』における死に関わる物語が現代の〈お迎え〉体験に比して特徴的であるのは、たとえば家族や知人であれ、死者や死に瀕した人が一般に不気味さや恐怖を感じさせる存在であり、ときに災いを為す存在として現れている点である。そこでは死者はもちろん、死に瀕した人は既は「向こう側にいる存在」として、生者とは一線を画す存在とされていると見られよう。一例として、亡夫が妻のもとへ、典型的な〈お迎え〉体験のそれとは異なったニュアンスにおいて「迎え」に訪れてきた話である拾遺168話を掲げておく¹⁾。

1) 念のために確認しておけば、災いを為す死者というこうした観念が現代に見られないというわけではなく、親しい存在としての死者と災いを為す死者という観念が併存しているのが実態と言えよう。こうした死者の性格の二面性の問題については、池上良正（2003）が民衆宗敎史の観点から考察を行っている。

土淵村字柄内の渋川の某という男は、傷寒か何かの病気で若死にしたが、其葬式の晩から妻のところへ毎晩たづねて来て、とてもお前を残したのでは行く処へ行けぬから一緒に連れに来たと言った。他の者の目には何も見えなかつたが、其女房は毎夜十時頃になると、ほれあそこへ来た等と苦しみ悶えて、七日目に到頭死んでしまったさうな。三十年近くも前の話である。(柳田 [1935] 1997 : 129)

さしあたり明治末期に関して言えば、臨死者出現譚をはじめとするこの手の説話が岩手や遠野地方に特殊だったわけではないと考えられる傍証がいくつかある。そのひとつとして、1911年(明治44)に柳田が残した、次のような発言がある。

「遠野物語」に、あゝいつた風な話を、極くうぶのまゝで出さうとした結果、〔泉〕鏡花君始め、何だ、幾らも型のある話ぢやないか、といふやうな顔色かおつきをした人が、段々あつたけれども、負け惜みのやうだが、自分は、あれを書いている時から、あの話が遠野だけにしかない話だとは思つて居なかつた。寧ろ、西は九州の果にまで、類型のあるのを、珍重したくらゐだつた。けれども、それを列記したらば、その面白味が減ると思つて、木地を出す事にばかり苦心したのである。(柳田 [1911] 1999 : 331) ¹⁾

さらに、『遠野物語』の成立に深く関わり、佐々木喜善が語る話を「怪談」として捉えた水野葉舟に至っては、「怪談の中で、一番多い話は、瀕死の人、又は死んだ人が、遠い土地の人の前に現われて来たという話だ。一方では寺などによくある事で、寺に来て知らせると言うような事。このような話は一番多い。……恐らく読者諸君の中で、この種の話の一つ二つを御存知で無い人はあるまいし、自分で経験された人も少くはあるまいと思う」(水野 2001 [1908] : 112) とさへ述べている。付言しておく、この水野や南方熊楠は、柳田に触発されながら、フレデリック・マイアーズなどを引いて西洋における臨死者出現譚にも気を配っている(南方 [1914] 1971)。

結局、このように死にまつわる物語を多く収めている『遠野物語』にあっても、親しい存在としての家族や知人が生者の方へ迎えに来るというモチーフを見出すことはできない。もし『遠野物語』に見られる説話が、ある程度、明治期の日本における死にまつわる観念を映し出しているのだとすれ

1) 1930年の「東北と郷土研究」にも同趣旨の発言がある(柳田 2001 [1930] : 313 ; 石井2005 [2000] : 197)。

2) 川村邦光 ([1990] 2006) は、日露戦争後、国家による先祖観の再編成と平行するかたちで、柳田が「先祖の発見」に至った旨を論じている。もしも、死者を親しい存在とする現代の〈お迎え〉体験を日露戦争より後に顕著となった現象と解する立場に立つならば、〈お迎え〉体験の登場と、『遠野物語』(1910年)から『先祖の話』(1946年)に至る柳田の筆致の変化との間に、ひとつの平行関係を認めることもできよう。つまり、『先祖の話』では死者を恐ろしい存在として描くしかたが影を潜め、生者と死者の関係の親しさが強調されるに至っているからである。

ば、典型的なかたちの〈お迎え〉体験が顕著になるのは明治期よりも後であるという解釈が成り立つ。夥しい戦死者を出した日露戦争や太平洋戦争の体験が日本人の死生観に大きく影響したらしいことを想起するなら (ex. 川村 [1990] 2006 ; 波平 2004)、この解釈の妥当性はより高まろう²⁾。

しかしまた、明治期以前にも〈お迎え〉体験は生じていたものの、ことさらに語られることがなかったのだといった解釈や、人々の間で語られていたが、記録が残されることがなかったといった解釈もまた十分にありうる。事実、『現代民話考』には1901年(明治34)の事例が見られていたし、その後についても『現代民話考』以外にほとんど記録が為されていないことを考えれば、いずれの解釈の妥当性についても真剣に検討してみる必要がある。その際には、時代時代における「死をめぐる物語の語られ方」を確かめることが肝要となるだろう。

4. 〈お迎え〉と怪談文化

死をめぐる物語の記録として、『遠野物語』と『現代民話考』は独特の位置を占めている。すなわち、死をめぐる記録の多くが、「怪談」「伝説」「昔話」といった範疇の下に整序されたものであるのに対し、この二つの著作はそうした整理のしかたに一定の距離を置いている。なお、松谷みよ子による現代民話の収集は、その最初のアンソロジーの副題が「私の遠野物語」とあるように、『遠野物語』を意識して為された仕事である(松谷 [1984] 1988, 2000)。

近年、『遠野物語』の成立に明治後半以降の怪談ブームが関わっていたとの指摘がいくつかあり(石井 [2000] 2005 ; 横山 2001 ; 大塚 2007 ; 姜 2007 ; 東 2010)、その中には東雅夫のように『遠野物語』を怪談文芸の継承・発展を狙った著作に他ならないと位置づける論者もいる。柳田が怪談に人並み以上の関心を抱き、これに造詣が深かったことは確かであろう。しかし、死をめぐる物語の描き方という観点からすれば、『遠野物語』が同時代の動向から離れ、孤高のテキストとなった最大の点が、こうした「怪談」との決別にあった」([2000] 2005 : 194)という石井正己の評の方が的を射ている。それは、「大抵の怪談などを見ても言葉ばかりイヤに飾って」「唯面白く読ませる為に書いたものではないかと云ふものが多い」([1905] 2006 : 395)といった、怪談の話法に対する警戒心を示す柳田自身のことばからも裏書きされる (cf. also 柳田 [1910] 2006)。

幽霊譚を中心とする近世・近代の怪談においては、死者の出現は「怪異」でありイレギュラーな事態であるとされる。すなわち、「生者にとって、幽霊は本来あってならないもの」であり、「生者と亡者の間には絶対的な断絶がなければならなかった」のである(高田 [1995] 2001 : 218-219)。したがって、死者の出現という異常な事態は、現世に未練や恨みを残して成仏できないがゆえであるといった因縁・因果の物語の枠組みの中で説明されるものであった。こうした語られ方の中で、自らの不幸な運命を動機にしばしば生者に災いをもたらす、「哀れな、しかし恐ろしい存在」としての幽霊

1) 近世の説話についてはさらなる精査が必要であるが、手はじめに『耳囊』(1784-1814年)や『随筆辞典 奇談異聞編』、高田衛編『江戸怪談集』収録分の説話あたりを見ても、〈お迎え〉のパターンは見出されない。今回確かめた範囲内では『奇談雑史』(1856年)第3巻第18話が、結論として供養の重要性を説くものではあるものの、故人となった友人が「迎ひに」来る話としてもっとも近い。

という観念が成立し、今日も広く人口に膾炙するに到っている（諏訪 1988, 2010）。怪談文化の枠組みの中では、死者が恐怖の対象であることはそれが家族や知人であっても同様で、柳田が引いているように、人形浄瑠璃には「肉縁の深いほど、死人になれば怖いもの」といった言い方まで見えている（『撰州合邦辻』初演1773年、柳田 [1932] 2000 : 209）¹⁾。

明治後半の怪談ブームの中であって、死にまつわる物語として『遠野物語』が持つ独自性は、怪談が傾きがちな虚飾や露悪趣味を避けるとともに、因果・因縁の説明的な物語の枠組みを遠ざけようとした点にある。井口時男（1996）は、『遠野物語』のこうした記述のスタイルを評して、「説明」の一步手前で立ち切られた一回限りの「奇譚」であると表現している。『遠野物語』の文体については諸論者の注意を集めてきたところであるが（ex. 吉本 [1968] 1982 ; 内田 1995）、本稿の関心からすれば、戦略的に怪談文化のそれとは異なる語り口で死にまつわる物語を記述したことの意義は大きい。説明的であることに慎重な姿勢によって、やはり当時隆盛をみていた心靈主義にも巻き込まれずに済んでいると考えられる。松谷みよ子は、死にまつわる物語を集めることは「オカルトと誤解されやすい」という「危険」があると述べているが（[1986] 2003 : 18、[1984] 1988 : 13）、『遠野物語』のスタイルは予めそうした危険を回避すべく組み立てられていたものだったと言えよう。

ところが、怪談とは異なるこうした文体の意義にもかかわらず、『遠野物語』で現れる死者たちがやはり不気味で恐ろしい存在として描かれていることは、前節にて確かめたとおりである。このような「親しみ深い死者」の欠如が、前書きに「願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ」（[1910] 1997 : 9）とあるこの著書の狙いに沿った取捨選択の結果である可能性を考えあわせると、やはりこの著作から直接に明治期日本における〈お迎え〉体験の「実態」について確言することは難しい。

ひとつの関連するエピソードを紹介しておくが、柳田には、21歳で夭逝した佐々木喜善の娘・若の終末期の様子に触れた文章がある（[1940] 1998）。死を前に若は「始終手を摩つて何か尊いまぼろしを見るらしかった」とあり、あるいは〈お迎え〉体験が現れていたかもしれないと思わせる場面であるが、柳田は続けて「臨終の後先にも幾つかの不思議があつたといふが、強ひて其様な前置きを積み重ねて、この話の背景を彩どるべき必要を私は認めない」として、「私の記録して置きたいと思ふのは、此子の父が見たといふたつた三つの夢だけである」と、喜善が見たという夢の方へすぐに話を切り替えている（[1940] 1998 : 74）。若が見ていたらしい「まぼろし」や、そこに生じた「幾つかの不思議」に対しては、冷淡に感じられるくらいまったく興味を示しておらず、この話について言えば、柳田の関心の在処が、死にゆく人の姿の実際にはなかったことが知れるのである。

5. 『遠野物語』以降の民俗学

『遠野物語』に収められた説話は、「怪談」「昔話」「伝説」といった枠組みに収まるものではない。『現代民話考』もまた同様で、松谷の言う「現代民話」ということばは、「民話」というカテゴリーが帯びている「前近代」や「地方」に偏したニュアンスを崩そうとする意図が感じられるもので、ひとつの範疇として厳密な定義を行うことは避けられている。こうしたアプローチにあってはじめて、「怪談」「昔話」「伝説」といった範疇には収まりにくい〈お迎え〉体験譚が記録されえたものと考えられる。

ところが一方では、民俗学の主流に民俗資料採集のための基本的なカテゴリーを導入し、『遠野物語』とはまったく違ったアプローチを用意したのも柳田國男その人である。『民間伝承論』（1934年）

や『郷土生活の研究法』（1935年）では採集すべき民俗資料を分類して、（両書の細かな異同は省くと）「語り物」「昔話」「伝説と説話」「雑話・世間話」等の項目を挙げており、「心意（諸）現象」の中では死後世界や靈魂観という主題にも触れている。他に死に関わる事柄としては「有形文化」に「葬式」という項目が立てられている。これらの民俗資料分類が、後の民俗学における死にまつわる物語の研究状況を規制することになったと考えられる。

こうした中でも、柳田が「兆」に注意を喚起していたこともあって、死の予兆、すなわち〈お知らせ〉ないし〈虫の知らせ〉をめぐる言い伝えについては比較的記録がある。1949～50年に実施された全国慣習状況調査では「死の前兆・予知」という項目が立てられている。その報告中、滋賀市部について「親兄弟が死ぬ時枕見に立つ」という言い傳えの報告がある（迷信調査協議会 1955：344）。簡潔すぎて意味が取りにくいのが、おそらくは死に瀕した人はその子どもや兄弟の寢床へ最期の挨拶に来るものだという意味であろう。そうだとすれば、これもやはり〈お迎え〉体験というよりも、臨死者出現のパターンである。

井之口章次（1975）は各種の死の予兆の話を整理するとともに、重体の患者への魂呼びについて多くのヴァリエーションを紹介している。武田明（1987）は病人の挙動から死期を予知する習俗を紹介し、「長年患っている病人が古い昔のことを楽しそうに語ったり、食欲が急にしたりすると、「エゲヲ見セタ」と言ったり「ゲン見セ」と言って、死期の迫っていることを知ったのである。病人が手の平（掌）をつくづく見たり、両手を上げて頭のあたりをまさぐるようにするのも生理的な理由があるのかも知らぬが、やはり死期の近いものと家族の人にはうけ取られていた」（1987：20-21）と述べている。より近年では、木村博（1995）や板橋春夫（2007）がそれぞれ静岡県伊東市・熱海市と石川県石川郡吉野谷村における看取りの作法を扱っている。

その他、死の予兆に関わって出現すると伝えられるものに、「遠野物語拾遺」にも見えていた岩手県上閉伊の「オマク」（佐々木 [1924] 1974）や、青森県下北および新潟県佐渡の「タマシ」（今野 1989 [1967]；山田 2007）、新潟県東蒲原の「山の神」（波平 1974, 2004）、岡山県備前の「ミサキ」（小嶋 2001 [1996]）といったものの報告がある。これらには、広義に解するところの〈お迎え〉に重なる部分も見受けられるものの、死に瀕した人物の方へと家族や知人が現れる典型的パターンとはやはり違っている。斎藤たま（1986）は、死者がもたらす災いを避ける呪いを各地に求める中で、鳥取県西伯郡名和において「同じ年だと（死者がその知人を）迎えに来る」という表現を聞いているが、もちろんここで言う「迎え」とは望ましくない災厄としての死を意味している。

以上の民俗学的諸研究では、死にまつわる個別的な物語を記録するというよりも、死の予兆や靈魂観といった特定の範疇について調査対象地域に特殊に見える観念や伝承を切り取ろうとする傾向が強い。ここには民族資料分類の発想が反映しており、〈お迎え〉体験譚の記録を見つけることは難しい。それに対して田原開起の『死と生の民俗』（2008年）は、大正・明治生まれの高齢者の個別的体験談のかたちで広島県東部における民俗の記録を試みた注目すべき研究であり、その中には〈お迎え〉の

-
- 1) ただし、ここで出現したと語られているのは「花車」や「仏さん」であって家族や知人ではない（田原 2008：38-43）。田原氏から執筆者が個人的に伺ったところでは、広島県三原市周辺でも家族が現れる〈お迎え〉の話が聞かれるという。

話を散見することができる¹⁾。

結局、〈お迎え〉体験の分布については、少なくとも太平洋戦争期以降には広い地域的分布を示しているとは言えても、それ以前の分布については確かなことはまだ不明であるとするほかない。むしろ本稿における先行研究の検討から知られるのは、時代時代の「死生観」と呼ぶものが辿られるとすれば、それは個々人が持つ「体験」ないし「思考」の内容からだけ成るのではなく、それが語り伝えられるしかたや記録されるしかたと不可分であるということである。思考や体験が物語り行為と離れて存在するものではないということであれば、きわめて一般的な洞察であって、ここで改めて言い立てるべきことには思われないかもしれない。しかし、基本的に生者にとって死後の世界が与り知らぬものである限り、死に関わる場面においては体験即物語という事態がことさらに露呈してくるのであり、したがって体験の語られ方そのものを「死生観」の重要な構成要素として理解すべき必要がある。

本稿では、浄土信仰、怪談文化、それに民俗資料分類の諸範疇といったものが、〈お迎え〉体験の主題的な表現と理解を妨げてきた様子を確かめてきた。もし、死にまつわる物語を枠づけている認識図式の分析を進めようとするなら、次には現代の社会状況下にあってもっとも強力に機能している近代医学のそれについて考察することが課題となろう (Kleinman [1995] 1997; 諸岡ほか2008)。最後に、近代医学および当該社会の宗教伝統に根ざした認識図式が死に関わる「体験」の表現と理解を左右していることを示す事例をイギリスから紹介して、この課題の重要性を確かめて本稿の締めとしたい。

あるキリスト教ホスピスのチャプレンは、あるクライアントが死別した夫の存在を感じていることについて、それは有益ではあっても、結局のところは幻覚にすぎないと説明して片づけていた。このような還元主義的説明は精神医学の文献に共通したものだが、個人の宗教的経験をそれとして真剣に受けとめようとする、自負ある現象学者ならばこのような説明を拒むだろう。他の点では心の広いチャプレンは、この夫を亡くした妻の経験をそれとして受けとめることができなかったが、それはひとつには、死者とのコミュニケーションを悪とするプロテスタントの伝統に深く浸った彼の信念のゆえであり、ひとつには世俗的精神医学に感化されているからである (Walter 2002: 138)

〔付 記〕

- 1) 本研究は、科研費22530548「地域社会にみる死生観の現在に関する複合的研究」の助成を受けて行われたものです。
- 2) 諸岡の方では、〈お迎え〉やこれに類似した体験の報告を随時募集しています。ご協力いただける方には、ぜひ morooka@edu.shimane-u.ac.jp までご一報くださいますようお願い申し上げます。

【参照文献】

- 浅見洋、2006、「在宅における終末期高齢者が表出した死生観とその宗教学的考察」『宗教研究』80(2)。
東雅夫、2010、『遠野物語と怪談の時代』角川書店。
井口時男、1996、『柳田国男と近代文学』講談社。

- 池上良正、2003、『死者の救済史』角川書店。
- 石井正己、[2000] 2005、『遠野物語の誕生』筑摩書房。
- 板橋春夫、2007、『誕生と死の民俗学』吉川弘文館。
- 井之口章次、1975、『日本の俗信』弘文堂。
- 内田隆三、1995、『柳田国男と事件の記録』講談社。
- 大井玄、2008、「「自分の死」を死ぬとは」島菌進・竹内精一編『死生学1』東京大学出版会。
- 大塚英志、2007、『怪談前後』角川書店。
- 笠原一男、1978、『近世往生伝の世界』教育社。
- 川村邦光、[1990] 2006、『幻視する近代空間』青弓社。
- 姜竣、2007、『紙芝居と〈不気味なもの〉たちの近代』青弓社。
- 木村博、1995、「世相と生活感覚」『静岡県史 別編1』静岡県。
- 清藤大輔・板橋政子・岡部健、2002、「仙台近郊圏における「お迎え」現象の示唆するもの」『緩和医療学』4(1)。
- 桐原健真・諸岡了介、2009、「“あの世”はどこへ行ったか」清水哲郎監修、岡部健・竹之内裕文編『どう生きどう死ぬか』弓箭書院。
- 国森康弘、2009、『家族を看取る』平凡社。
- 小嶋博巳、[1996] 2001、「死霊とミサキ」小松和彦編『怪異の民俗学6』河出書房新社。
- 今野圓助、[1967] 1989、「俗信」九学会連合下北調査委員会編『下北』平凡社。
- 斎藤たま、1986、『死とものけ』新宿書房。
- 佐々木喜善、[1924] 1974、「ザシキワラシの話1」山下久男監修、山田野理夫編『遠野のザシキワラシ』宝文館出版。
- 信濃毎日新聞社文化部、2010、『大切な人をどう看取るのか』岩波書店。
- 諏訪春雄、1988、『日本の幽霊』岩波書店。
- 、2010、『靈魂の文化誌』勉誠出版。
- 高田衛、[1995] 2001、「幽霊の〈像〉の変遷」小松和彦編『怪異の民俗学8 幽霊』河出書房新社。
- 武田明、1987、『日本人の死霊観』三一書房。
- 蛸島直、1998、「危機と変化の民俗」小松和彦・香月洋一郎編『講座日本の民俗学2』雄山閣。
- 谷山洋三、2004、「スピリチュアルケアにおける死後存続の信念とその意義」『四天王寺国際仏教大
学紀要』。
- 田原開起、2008、『死と生の民俗』近代文芸社。
- 田村圓澄、1983、「『往生伝』について」『日本佛教史5』法蔵館。
- 中山康子、2005、「暮らしの中のスピリチュアルケア」『緩和ケア』15(5)。
- 波平恵美子、1987、「新潟県東蒲原郡室谷ムラにおける民俗的世界観」『国立歴史民俗博物館研究報
告』15。
- 、2004、『日本人の死のかたち』朝日新聞社。
- 華園聰麿、1983、「『往生伝』的浄土信仰における心の問題」楠正弘編『解脱と救済』平樂寺書房。
- 松谷みよ子、[1984] 1988、『あの世からのことづて』筑摩書房。
- 、[1985-1996] 2003-2004、『現代民話考』筑摩書房。

- 、2000、『現代の民話』中央公論新社。
- 、2004、『異界からのサイン』筑摩書房。
- 水野葉舟、2000、横山茂雄編『遠野物語の周辺』国書刊行会。
- 南方熊楠、[1914] 1971、「臨死の病人の魂、寺に行く話」『南方熊楠全集2』平凡社。
- 迷信調査協議会編、1955、『生活慣習と迷信』技報堂。
- 諸岡了介・相澤出・田代志門・岡部健、2008、「現代の看取りにおける〈お迎え〉体験の語り」『死生学研究』9。
- 柳田國男、[1905] 2006、「幽冥談」『柳田國男全集23』筑摩書房。
- 、[1910] 2006、「怪談の研究」『柳田國男全集23』筑摩書房。
- 、[1910] 1997、『遠野物語』『柳田國男全集2』筑摩書房。
- 、[1911] 1999、「己が命の早使ひ」『柳田國男全集20』筑摩書房。
- 、[1930] 2001、「東北と郷土研究」『柳田國男全集28』筑摩書房。
- 、[1932] 2000、「幽霊思想の変遷」『柳田國男全集25』筑摩書房。
- 、[1934] 1998、『民間伝承論』『柳田國男全集8』筑摩書房。
- 、[1935] 1997、「遠野物語拾遺」『柳田國男全集2』筑摩書房。
- 、[1935] 1998、「郷土生活の研究法」『柳田國男全集8』筑摩書房。
- 、[1940] 1998、『民謡覚書』『柳田國男全集2』筑摩書房。
- 、[1946] 1998、『先祖の話』『柳田國男全集15』筑摩書房。
- 山田慎也、2007、『現代日本の死と葬儀』東京大学出版会。
- 横山茂雄、2001、「怪談の位相」『遠野物語の周辺』国書刊行会。
- 吉本隆明、[1968] 1982、『改訂新版 共同幻想論』角川書店。
- Kleinman, Arthur, [1995] 1997, *Writing at the Margin*. Berkeley: University of California Press.
- Walter, Tony, 2002, "Spirituality in Palliative Care," *Palliative Medicine* 16.
- 『日本思想大系6 源信』石田瑞麿校注、岩波書店、1970。
- 『日本思想大系7 往生伝 法華験記』井上光貞・大曾根章介校注、岩波書店、1974。
- 『近世往生伝集成』笠原一男編、山川出版社、1978-1980。
- 『日本戯曲全集37 続々義太夫狂言集』春陽堂、1932。
- 『耳囊』長谷川強校注、岩波書店、1991。
- 『奇談雑史』佐藤正英・武田由紀子校注、筑摩書房、2010。
- 『隨筆辞典 奇談異聞編』柴田宵曲編、東京堂出版、1961。
- 『江戸怪談集』高田衛編・校注、岩波書店、1989。